

幼児期における恐怖対象の発達的变化

富 田 昌 平*

The development of the scary targets in early childhood

Shohei TOMITA

要 旨

本研究では、幼児期における恐怖対象の発達的变化について検討した。研究 1 では、保育園年中児 29 名、年長児 26 名を対象に、恐怖対象の有無やその内容と理由、5 つの一般的な恐怖対象（お化け、動物・虫、暗闇、幽霊、注射）に対する感情評価について尋ねた。その結果、子どもの恐怖対象の数は加齢に伴い減少すること、女兒は男児よりも恐怖対象を持つ傾向にあることが示された。研究 2 では、幼稚園児の保護者 66 名を対象に、子どもの恐怖傾向とその強さ、恐怖対象の内容と発達的变化について尋ねた。その結果、恐怖対象の発達差や性差に関して、研究 1 の結果が概ね繰り返された。また、内容的には年齢や男女問わず、お化け、動物・虫、幽霊、暗闇、1 人であることなどが多く挙げられ、加齢に伴い想像的なものに対する恐怖が増加することが示唆された。考察では、幼児期における恐怖対象とその発達的变化を踏まえた上で、「怖い」を楽しむ実践を育児や保育においてどのように位置づけ、展開していくかが議論された。

【キーワード】 恐怖対象、想像、幼児

問題と目的

幼児期の子どもはどのようなものを、どのような理由で怖がるのであろうか。また、その恐怖の数や強さは発達的にどのように変化するのであろうか。

Jersild (1968/1972) によると、子どもの恐怖対象は、最初、大きな音や騒がしい音、見知らぬ物・人・場所、高い所、急に動かされること、痛みなどであるが、それらは 2 歳から 4 歳の間に次第に減少し、代わりに想像上のもの、空想的なもの、暗闇、一人であることなどを怖がるようになるという。知識や経験の増大に伴って、恐怖の対象が目に見えるものから目に見えないものへと変化するのである。

また、Hurlock (1964/1971) によると、恐怖対象の数や強さは 4 歳頃まで次第に増加し、その後減少する。性差はいずれの年齢でも見られるが、特に年齢が上がるに従って顕著になる。一般的に、女兒は男児よりも恐怖を示し易いという。その他、恐怖の感受性は、年齢や性別以外に、性格、過去の個人的経験、知的水準、親や仲間から学ぶ社会的・文化的価値、周囲の状況や刺激の与え方、現在の生理的・心理的状況など多くの

要因によって左右されることが示されている。

このように子どもの恐怖に関する研究は過去に多くなされてきたが、近年、その数は決して多いとは言えない。近年の研究を目的の観点から整理すると、次の 4 つに分けられる。第 1 に、恐怖症を持つ子どもの理解とその対応に関する研究である (Muris, & Merckelbach, 2000; Muris, Merckelbach, & Collaris, 1997; Muris, Merckelbach, Ollendick, King, & Bogie, 2001)。ここでは、一般的な恐怖と特定の恐怖症との関連性、恐怖症の頻度、内容、深刻さ、起源、対処行動などが主に質問紙で検討されている。第 2 に、空想と現実との区別における恐怖感情の影響に関する研究である (Carrick, & Quas, 2006; Carrick, & Ramirez, 2012; Samuels, & Taylor, 1994)。ここでは、子どもは感情的に中立な、または恐怖を喚起させ易いような空想的場面あるいは現実的な場面のいずれかを提示され、それが現実生活で起こり得ることかどうかの判断とその理由を求められるという実験的な手法で検討されている。第 3 に、過去の経験や現在の認知状態が現在の恐怖感情の生起や強さに影響を及ぼすことに関する研究である (Sayfan, & Lagattuta, 2008, 2009)。ここでは、子ど

* 幼児教育講座

もは異なる過去の経験や現時点で遭遇した出来事に対して異なる認知状態にある人物についての物語を提示され、彼らがどのような感情を生起し、その強さはどうかの判断とその理由を求められるという実験的な手法で検討されている。第4に、ごく最近になって行われるようになった研究であるが、「怖い」を楽しむ子どもの心理の発達と保育実践に関する研究である（富田, 2014, 2016; 富田・野山, 2014）。ここでは、子どもは怖い絵または怖くない絵が描かれているとされるカードを伏せた状態で提示され、どちらか1つだけ見ることができるとしたらどちらを見たいかの判断を求められるという実験的な手法と、怖いものをあえて想像して楽しむという保育現場での実践報告の内容分析という2通りの方法で検討されている。

とりわけ、「怖い」を楽しむ子どもの心理と保育実践に関する研究は、従来、不快で回避すべき感情として捉えられてきた恐怖がなぜ子どもたちの間であえて近付こうとする楽しいものへとなり得るのかという本質的問題に焦点を当てながら、育児や保育の現場においてその種の遊びや活動を今後より一層意識的・意図的に楽しむために、その発達プロセスと認識基盤、保育方法、展開過程、意味や価値などを明らかにしようと試みたものであり、理論と実践とのつながりという点でも興味深い。

これまでの研究では、怖いものをあえて見ようとする「怖いもの見たさ」の心理は3歳から6歳の間に次第に発達すること、そうした心理の背景には（特に5、6歳児では）虚構と現実とを区別する能力の発達がかわっていることが示されている（富田・野山, 2014）。また、「怖い」を楽しむための条件の1つである虚構と現実との区別能力が未発達な2歳児クラスの子どもにおいても、「怖い」を楽しむ実践は見られ、その実践を可能にするために保育者が子どもに適宜提供している経験の諸相とその展開過程の実際が明らかにされている（富田, 2016）。

しかし、冒頭で述べたような幼児期の子どもにとっての恐怖対象の内容やその理由、恐怖の数や強さについては、半世紀以上前の古典的研究（Hurlock, 1964/1971; Jersild, 1968/1972）においては示されているものの、最近の子どもの実際について明らかにした研究は見当たらない。今後、「怖い」を楽しむ子どもの心理と保育実践に関する研究を展開していく上で、これらの基礎的な知見を得ておくことは不可欠である。よって、本研究では、幼児期における恐怖対象の発達の量的変化について、特にその内容と理由、数や強さに焦点を当て、実証的な知見を得ることを目的とする。具体的には、幼児の恐怖対象とその発達の量的変化について、幼児に対する直接的なインタビュー調査（研究1）と

幼児の保護者を対象とした質問紙調査（研究2）という2つの研究を行う。

研究1

方法

被調査者： Y市内の保育園の年中児29名（男児16名、女児13名；平均年齢5歳0か月、年齢範囲4歳7か月～5歳6か月）、年長児26名（男児13名、女児13名；平均年齢6歳0か月、年齢範囲5歳7か月～6歳6か月）を対象とした。

手続き： 保育園内の一室で個別にインタビューを行った。質問では、①恐怖対象の有無（「何か怖いものはある？」）、②恐怖対象の内容とその理由（「何が怖い？ どうして怖い？」「他に怖いものはある？ どうして怖い？」）、③一般的な恐怖対象に対する感情評価とその理由（「お化け（または動物・虫、暗闇、幽霊、注射）は怖い？ どうして怖い？」）について尋ねた。なお、一般的な恐怖対象として取り上げた5つは、大学生130名を対象とした予備調査において、子ども時代の恐怖対象として挙げられることが多かった上位5つであったことから、これらを取り上げた。

結果と考察

恐怖対象の有無と内容： 恐怖対象の有無に関して、子どもの回答を「あり」「なし」「わからない」の3つに分類した。Figure 1は年齢別及び男女別の各カテゴリーの人数を示したものである。年齢差について検討するために、「わからない」と回答した者を除外して、2（年齢）×2（あり／なし）の χ^2 検定を行ったところ、有意傾向が確認された（ $\chi^2(1)=3.72, p<.10$ ）。残差分析の結果、「あり」回答は年長児（25名中18名）よりも年中児（25名中24名）の方が多いことが示された（ $p<.05$ ）。男女差についても同様に、「わからない」と回答した者を除外して、2（性別）×2（あり／なし）の χ^2 検定を行ったところ、有意傾向が確認さ

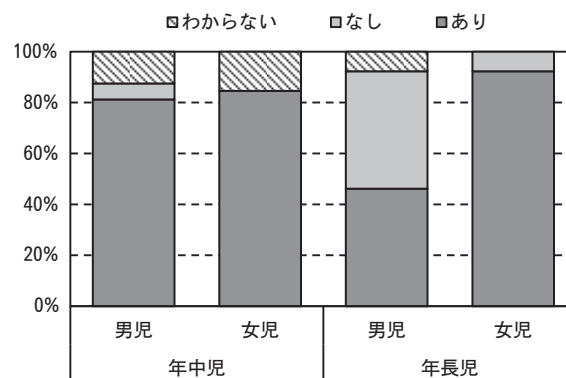


Figure 1 恐怖対象の有無に関する各回答の出現割合

れた ($\chi^2(1)=3.27, p<.10$)。残差分析の結果、「なし」回答は女児 (24 名中 1 名) よりも男児 (26 名中 7 名) の方が多いことが示された ($p<.05$)。このことから、幼児期において多くの子どもは恐怖対象を持っているが、それらは 4 歳から 5 歳にかけて減少すること、また、恐怖対象の有無には男女差があり、男児よりも女児の方が怖がる対象を持つ傾向にあることが示された。

恐怖対象の内容に関しては、先の質問で恐怖対象が「あり」と回答した年中児 24 名、年長児 18 名を対象に質問を行った。子どもの回答は、①お化け、②幽霊、③動物・虫、④注射、⑤その他、⑥無回答の 6 つに分けられた。Table 1 は、結果を年齢別及び男女別に示したものである。子どもには複数の回答 (「その他には?」) を求めたため、Table 1 に示された人数の総和は総回答者数と異なる。1 名につき最大 3 つの回答があった。このうち、お化けには、お化け (17 名) の他に、お化け屋敷 (3 名)、骸骨 (2 名) が含まれ、動物・虫には、ヘビ、ハチ (各 4 名)、ライオン (3 名)、オオカミ、ゾウ、クモ (各 2 名)、ワニ、キリン、サル (各 1 名) が含まれた。また、その他には、雷、泥棒 (各 2 名)、怖い夢、夜のトイレ、怪獣、人形、ピチュー (各 1 名) が含まれた。

Table 1 恐怖対象の内容に関する各カテゴリーの出現度数

	年中児		年長児	
	男児	女児	男児	女児
回答者数	13	11	6	12
お化け	7	4	4	7
動物・虫	8	4	2	6
幽霊	3	5	0	1
注射	1	2	0	0
その他	4	1	2	3
わからない	0	1	0	0

注. 恐怖対象「あり」回答者のみを対象とした (繰り返しを含む)。

Table 1 に示すように、最も多く挙げられた恐怖対象はお化け (22 名、52%) であり、次いで動物・虫 (20 名、48%)、幽霊 (9 名、21%) の順であった。年齢差、男女差ともに見られなかった。このことから、幼児期に子どもが恐怖を感じる対象のうち、最も一般的なものはお化けと動物・虫であり、約半数がそれらを挙げる 것이示された。

一般的な恐怖対象に対する感情評価: お化け、幽霊、動物・虫、暗闇、注射という 5 つの一般的な恐怖対象に対する子どもの感情評価の回答は、「怖い」「怖くない」「わからない」の 3 つに分類された。Figure 2 は年齢別及び男女別の各セルの人数を示したものである。全体的に、「怖い」回答はお化け 69%、幽霊 69%、動物・虫 51%、暗闇 51%、注射 51% で得られた。年齢差について検討するために、「わからない」と回答した者を除外して、2 (年齢) \times 2 (あり/なし) の χ^2 検定を 5 つの対象で繰り返し行ったところ、いずれの対象でも有意差は確認されなかった。男女差についても同様に、「わからない」と回答した者を除外して、2 (性別) \times 2 (あり/なし) の χ^2 検定を 5 つの対象で繰り返し行った。その結果、お化けにおいて有意傾向 ($\chi^2(1)=3.04, p<.10$)、幽霊において有意差が示された ($\chi^2(1)=8.78, p<.01$)。残差分析の結果、お化けでは、「怖い」回答は男児 (27 名中 16 名) よりも女児 (26 名中 22 名) の方が多いこと ($p<.05$)、幽霊も同様に、「怖い」回答は男児 (27 名中 14 名) よりも女児 (26 名中 24 名) の方が多いことが示された ($p<.01$)。

また、全体的な傾向について検討するために、各対象で「怖い」回答することに 1 点を与え、0 点から 5 点の範囲で得点化した。この恐怖得点を従属変数として、2 (年齢) \times 2 (性別) の分散分析を行った。その結果、年齢の主効果の有意傾向 ($F(1,51)=3.46, p<.10$) と性別の主効果の有意差 ($F(1,51)=9.81,$

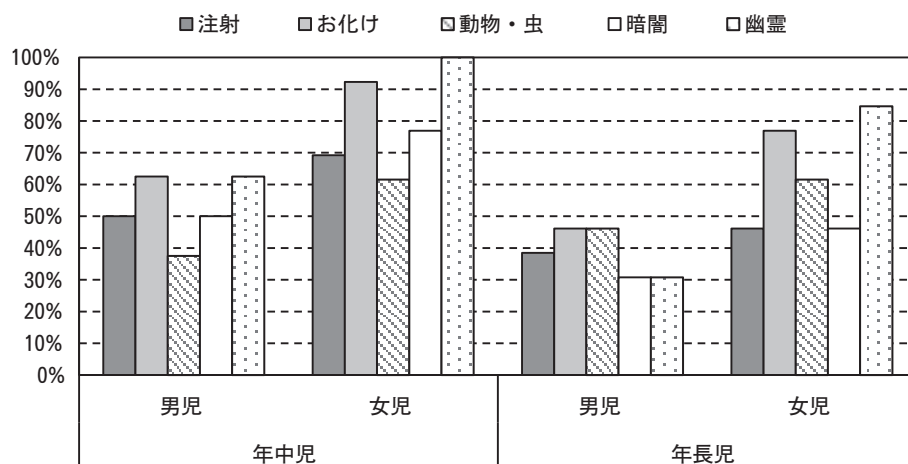


Figure 2 一般的な恐怖対象に対する「怖い」回答の出現比率

$p<.01$) が確認された。LSD 法による下位検定を行った結果、年中児 ($M=3.31$) は年長児 ($M=2.54$) よりも、女児 ($M=3.58$) は男児 ($M=2.27$) よりも、恐怖得点が高く、恐怖対象の数が多いことが示された ($p<.05$)。こうした結果は、先述の恐怖対象の有無に関する結果を支持するものであると言えよう。

恐怖の理由づけ： 先述の 5 つの一般的な恐怖対象に対する恐怖の有無の質問において、「怖い」と回答した場合にのみ、その理由についても尋ねた。恐怖の理由づけは、大きく次の 9 つに分類できた。①苦痛…「痛いから」「チクッとするから」など身体的苦痛について言及した場合。②感情…「怖いから」「ちょっと怖い」など自己の内面で生じる感情について言及した場合。③外見…「口が大きいから」「骨だから」など対象の外見的特徴や、「目が怖い」「歯が怖い」など対象の身体部位について言及した場合。④危害…「食べられそうだから」「噛むから」など対象が及ぼす可能性がある危害について言及した場合。⑤出現…「突然出てくるから」「何かが出てきそうだから」など対象が示す可能性のある不意の出現について言及した場合。⑥状況…「暗いから」「見えないから」など対象自体の不利益な状況について言及した場合。⑦経験…「見たことあるから」「出てきたから」など自己の経験について言及した場合。⑧その他…上記の 7 つのいずれにも該当しない場合。⑨無回答…無回答または「わからない」と回答した場合。Table 2 は、結果を対象別及び年齢別に示したものである。

Table 2 に示すように、理由づけには対象による違いが見られた。注射では、大部分の子どもが予想される身体的な「苦痛」を理由として挙げた。子どもにとって注射のイメージは極めて単純であることが分かる。お化けでは、年中児ほど対象の「外見」に言及し、年長児ほど対象が示す不意の「出現」に言及した。これは、子どもにとってのお化けのイメージが、目に見え

る側面から目に見えない側面へと移行していくことを表しているのかもしれない。動物・虫では、対象の「外見」と予想される「危害」への言及が多く見られた。これは恐らく、彼らの知識や経験を反映したものであり、その意味では年中児と年長児であまり違いはないようである。暗闇では、対象が示す不意の「出現」と「状況」そのものに対する言及が多く見られた。暗闇に対するイメージに年齢による違いはないが、動物・虫とは異なり、それは彼らの知識や経験を反映したものである。幽霊では、子どもの理由づけは 1 つか 2 つに偏らず、多様であった。これは彼らにとって幽霊概念がお化け概念から自立し始めてはいるものの、まだ安定的なイメージを獲得するには至っていないことを示しているのかもしれない。

研究 2

方法

被調査者： Y 市内の幼稚園児の保護者 66 名（男児 34 名、女児 32 名）が対象であった。内訳は、年少児 19 名（男児 10 名、女児 9 名）、年中児 25 名（男児 12 名、女児 13 名）、年長児 22 名（男児 12 名、女児 10 名）である。

手続き： 保護者にクラス担任を通じて質問紙を配布し、1 週間後に回収した。質問紙では、最初にフェイスシートで子どもの月齢、性別、きょうだい数と出生順位について尋ねた後、以下の質問を行った。①恐怖傾向（「お子さんは日頃よく恐がったり不安がったりするほうですか？」）の 5 段階評定、②恐怖の強さ（「お子さんが何かを恐がったり不安がったりするとき、その強さはとても激しいですか？」）の 5 段階評定、③恐怖対象の内容（「お子さんが恐がったり不安がったりするものは何ですか？」）の自由記述、④恐怖対

Table 2 一般的な恐怖対象に対する恐怖の理由づけに関する各カテゴリーの出現度数

	注射		お化け		動物・虫		暗闇		幽霊	
	年中児	年長児	年中児	年長児	年中児	年長児	年中児	年長児	年中児	年長児
回答者数	17	11	22	16	14	14	18	10	23	15
苦痛	16	11	0	0	0	1	0	0	0	0
感情	1	0	1	1	0	1	0	0	2	0
外見	0	0	10	4	6	4	0	0	4	3
危害	0	0	4	0	6	8	0	0	4	5
出現	0	0	1	9	1	0	8	5	5	3
状況	0	0	0	0	0	0	8	4	0	0
経験	0	0	2	0	0	0	0	1	2	0
その他	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
無回答	0	0	4	2	1	0	1	0	5	2

注. 各対象について「怖い」と回答した者のみを対象とした（繰り返しを含む）。

象の発達的变化（「お子さんが恐がったり不安がったりするものは、加齢に伴い変化してきましたか？変化したとすれば、以前はどうで、その後どのように変化したかをお書きください」）の自由記述。

結果と考察

恐怖傾向・強さ： 恐怖の傾向と強さに関して、「あてはまる」を5点、「あてはまらない」を1点として、1点から5点までの範囲で得点化した。Table 3は、結果を年齢別及び男女別に示したものである。得点が高いほど恐怖傾向が高く、恐怖の程度も強いことを表す。発達差及び男女差について検討するために、各得点を従属変数として3（年齢）×2（男女）の分散分析を行った。その結果、恐怖傾向に関しては、年齢の主効果（ $F(2,60)=2.46, p<.10$ ）と性別の主効果（ $F(1,60)=3.22, p<.10$ ）に有意傾向が見られた。LSD法による下位検定を行った結果、年中児は年少児や年長児よりも怖がる傾向が低く、女兒は男児よりも怖がる傾向が強いことが分かった（ $p<.10$ ）。また、恐怖の強さに関しては、性別の主効果に有意差が見られた（ $F(1,60)=11.38, p<.01$ ）。LSD法による下位検定を行った結果、女兒は男児よりも恐怖の程度が強いことが分かった（ $p<.01$ ）。このことから、恐怖傾向は幼児期において発達的に変化すること、女兒は男児よりも恐怖の程度が強いことが示唆された。特に、年中児で一旦恐怖の傾向が低下したことに限っては、後述の分析でも見られるように、3歳頃まで見られた特定の対象に対する恐怖が、4歳

頃には消失するという発達的变化に印象付けられて現れた可能性が考えられる。

恐怖対象の内容： 恐怖対象の内容に関して得られた回答は、①暗闇・夜、②1人であること・親と離れること、③動物・虫、④お化け、⑤テレビの怖い場面・キャラクター、⑥初めての人・場所・こと、⑦怖い夢・想像、⑧被り物・動く人形、⑨その他、⑩無回答の10カテゴリーに分けられた。被調査者からは複数の回答が得られたが、同一カテゴリーの回答が1名の被調査者において複数回確認された場合は、1つとしてカウントした。例えば、1名の被調査者による「怪物、お化け、想像上の怖いもの」という回答の場合、「お化け」カテゴリーに3ではなく1をカウントした。Table 4は、結果を年齢別及び男女別に示したものである。

Table 4に示すように、「暗闇・夜」「1人であること・親と離れること」「動物・虫」「お化け」「テレビの怖い場面・キャラクター」はどの年齢でも共通して見られ、男女による違いも見られなかった。その一方で、「被り物・動く人形」は年少児・年中児（4名）のみに見られ、「怖い夢・想像」は年長児（5名）のみに見られた。例えば、被り物に関する回答は、「怪獣などの着ぐるみを着た人を見ると、少し怖がる」「大きな被り物の人形が近づいてきたときや見かけたとき」というものであり、これは本物のように見せかけた偽物としての被り物の認識が4歳頃まで十分ではないために、生じた恐怖であると思われる。また、怖い想像に関する回答は、例えば、「成長段階において、歯が寝ている間に抜けて、飲み込んでしまうのではないのか、魚の骨を飲み込んだらどうなるのか、死んでしまうとかおなかの中に刺さっちゃうと言って、泣くことがあります」「最近『死ぬ』ということが不安なようで、『僕は死にたくない』と口にすることがある」というものであり、生命活動や身体機能の停止を意味

Table 3 恐怖傾向と強さの平均値

	年少児		年中児		年長児	
	男児	女兒	男児	女兒	男児	女兒
回答者数	10	9	12	13	12	10
恐怖傾向	2.50	3.67	2.42	2.46	2.92	3.20
恐怖の強さ	2.40	3.78	1.83	3.23	2.58	3.00

Table 4 恐怖対象の内容に関する各カテゴリーの出現度数

	年少児		年中児		年長児	
	男児	女兒	男児	女兒	男児	女兒
回答者数	8	9	10	12	11	8
暗闇・夜	3	4	3	4	4	2
1人であること・親と離れること	3	1	2	6	3	2
動物・虫	2	1	1	3	3	3
お化け	2	3	4	1	2	0
テレビの怖い場面・キャラクター	1	3	2	0	3	0
初めての人・場所・こと	0	1	0	4	1	1
怖い夢・想像	0	0	0	0	3	2
被り物・動く人形	1	1	1	1	0	0
その他	5	3	5	1	3	4

注. 恐怖対象に関する質問に回答した者のみを対象とした（繰り返しを含む）。

する死に対する認識が、5歳以降明確になるに従って、生じた恐怖であると思われる。また、初めての人・場所・ことは男児（1名）よりも女児（6名）に多く見られた。これは、一般的に女児は男児よりも共感性が高く、人間関係により関心を持つ傾向にあるため（Baron-Cohen, 2003/2005）、人間関係に困難さを感じた時に恐怖や不安の対象になり易かったのかもしれない。

恐怖対象の発達の変化： 恐怖対象の発達の変化に関しては、66名中46名（70%）から何らかの回答が得られたが、このうち10名は「変化なし」と回答していたため、実質的に発達の変化について回答した者は36名（55%）であった。Table 5は、怖がらなくなったものと怖がるようになったものの具体的内容と人数を示したものである。変化への言及は見られなかったものの、具体的内容については言及されていないという場合は集計から除外した（例：「小さい頃はそんなに泣かなかった気がします」「幼稚園に入園して変わりました」）。

怖がらなくなったものは、主に1歳から3歳の間の変化であり、怖がるようになったものは、主に4歳から6歳の間の変化であった。前者のうち最も多く見られた回答は「初めての人・場所・こと」であり、0-1歳代の人見知り始まり、1-2歳代の公園などで出会う見知らぬ大人や同年齢の子ども、遊び慣れていない大型遊具、そして3歳代に幼稚園に通うようになってからの幼稚園バスなどが含まれた。次に多く見られた回答は「1人であること・親と離れること」であったが、これは新たに怖がるようになったものとしても最も多く挙げられた。これについては、子どもの就園に合わせて母親が働き始め、家を留守にすることが多くなったことも原因のようである（例：「3歳までは

べったり専業主婦で、4歳になる前から働きだしたので、逆に4歳からの方が不安がったりするようになった」）。「お化け」は3歳頃までに怖がらなくなったものとして挙げられる一方で、これと類似した「暗闇・夜」「想像上の怖いもの」「死・幽霊」などは4歳以降に新たに怖がり始めたものとして挙げられた。これは子どもによるお化けのイメージが発達的に深まりと広がりを見せていく中で、具体的にイメージすることのできる対象物（妖怪や怪物など）は次第に実在性の観点から恐怖対象から外れていき、具体的にイメージすることの難しい対象物（幽霊や死など）が恐怖対象の中心を占めるようになってくるためなのかもしれない。

総合考察

本研究では、幼児期における恐怖対象の発達的变化について、子どもへの直接的なインタビューと保護者への質問紙調査という両面から検討した。研究の結果、幼児期において子どもは主にお化け、動物・虫、幽霊、暗闇、1人であることなどを怖がり、特に想像的なものに対する恐怖が増加する傾向にあることが示された。また、恐怖対象の数や強さは加齢に伴い減少し、女児は男児よりも恐怖対象を持つ傾向があることが示された。以下では、「怖い」を楽しむ子どもの心理の発達と保育実践に関する研究における本研究の位置づけを明らかにし、今後の研究及び実践の展開について考察する。

まず、本研究で示された結果は、半世紀以上前の古典的研究の結果（Hurlock, 1964/1971, Jersild, 1968/1974）ともほとんど相違なかった。このことは、子どもの恐怖対象とその発達的变化の様相は時代を超えて普遍であることを示唆していると言える。子どもが恐

Table 5 恐怖対象の発達的变化に関する各カテゴリーの出現度数

怖がらなくなったもの (主に3歳頃までに消失)		怖がるようになったもの (主に4歳頃から出現)	
初めての人・場所・こと	6	1人であること・親と離れること	4
1人であること・親と離れること	6	暗闇・夜	2
親・きょうだいに怒られること	3	想像上の怖いもの	1
お化け	3	死・幽霊	1
動物・虫	2	絵本の悪い人・意地悪な人	1
被り物・着ぐるみ	2	注射	1
テレビの怖い場面	1		
大型遊具	1		
自分の影	1		
大きな音	1		
真夏のアスファルト	1		
幼稚園バス	1		

注. 発達的变化について回答した36名のみを対象とした（繰り返しを含む）。

怖を生じさせる対象や出来事を自らの管理下に置き、恐怖を制御できるようになることは幼児期における重要課題の1つであるが、一方で、お化けや動物・虫、暗闇などは彼らにとって避けたい恐怖対象であることは事実である。そのことを本研究の結果は改めて示したと言えよう。

では、子どもはなぜこれらの、とりわけお化けなどの想像的なものを怖がるのであろうか。諸説あるであろうが、次の Subbotsky (2010) による見解は興味深い。彼は、「魔術的現象の魅力の本質は不明瞭さにある。まさにその本質ゆえに、魔術的現象は人々にとって滅多に観測されず、それが真実かどうかの確かな証拠も持ち得ない。ゆえに、それは絶えず真新しい」(p.64) と述べている。つまり、魔術的現象が本質的に持つ不明瞭さが真新しさを保ち、その結果、私たちは絶えずそれに魅了され続けるのである。お化けも科学的に検証不可能であるという点で、魔術的現象の一群と見做すことができる。謎めいて不明瞭であるが故に、子どもも大人も、言い知れぬ恐怖をそれに対して抱くのである。

他方、動物・虫などの現実的なものの場合、私たちはその恐怖の正体を暴くことができる。謎めいて不明瞭なものでは決してないのである。この点が、お化けなどの想像的なものとの大きな違いであろう。謎めいて不明瞭なものは常に真新しく、私たちの好奇心や探究心を喚起させる。怖がりつつも、それが何かを知ろうとし、そして探索を試みるのである。その意味で、想像的なものは現実的なもの以上に、たとえ恐怖を喚起させるにしろ、保育現場における探索や探究を促す遊び・活動に適した対象であり出来事であるのではなかろうか。

次に、今後の研究及び実践の展開であるが、そもそも幼児期に子どもはどのようなものをどのような理由で怖がるのかなどの基礎的な知見を、本研究で得ることができた点は重要である。お化けや暗闇は、「何かが出てきそうだから」「暗くてよく見えないから」など、その対象や状況の不明瞭さゆえに怖がられることが多かった。それは怖がる主体である子ども側の想像や推論の余地が大いにあることを示しており、他方、怖がらせる主体である親や保育者側においては、実践の方法や展開などに様々な可能性を感じさせる部分でもある。とりわけ、虚構と現実の区別の認識が未分化な4歳以前の子どものにおいては、大人による適度な援助や介入を得ながら、また虚構と現実の区別の認識が分化する5歳以上の子どものにおいては、子ども自身が主体的かつ積極的に仲間と協同し合いながら、迫りくる様々な困難(大人による怖がらせ)を乗り越えていくという方法及び展開が望ましいであろう。

「怖い」を楽しむ子どもの心理の発達と保育実践に関する研究は、まだ始まったばかりである。今後も実験的な手法を用いながら、それらの心理発達のメカニズムを解き明かすとともに、実践の質的分析方法を開発・工夫し、科学的で客観的な根拠に根差した新たな実践を創造していく必要があるだろう。

文 献

本論文は、山口芸術短期大学保育学科の授業「こども総合研究」において筆者の指導のもとに行われた研究の一部をまとめたものである。研究1は、西村祐子・中村夕紀・長谷真規子・濱田嘉代子・平本恵理(2004年度卒業)、研究2は、藤井陽子・藤村光代(2003年度卒業)によって実施された。調査にご協力いただいた幼稚園・保育園の先生方、幼児及び保護者の皆さんに深く感謝申し上げます。

文 献

- Baron-Cohen, S. (2005). 共感する女脳, システム化する男脳 (三宅真砂子, 訳). 東京: NHK 出版. (Baron-Cohen, S. (2003). *The essential difference: The truth about the male and female brain*. New York: Basic Books.)
- Carrick, N., & Quas, J. A. (2006). Effects of discrete emotions on young children's ability to discern fantasy and reality. *Developmental Psychology*, 42, 1278-1288.
- Carrick, N., & Ramirez, M. (2012). Preschoolers' fantasy-reality distinctions of emotional events. *Journal of Experimental Child Psychology*, 112, 467-483.
- Hurlock, E. B. (1971). 児童の発達心理学 (上巻) (小林芳郎・相田貞夫・加賀秀夫, 訳). 東京: 誠信書房. (Hurlock, E. B. (1964). *Child Development* (4th ed.). New York: McGraw-Hill.)
- Jersild, A. T. (1974). ジャーシルドの児童心理学 (大場幸夫・斎藤謙・沢文治・服部広子・深津時治, 訳). 東京: 家政教育社. (Jersild, A. T. (1968). *Child Development* (5th ed.). New Jersey: Prentice-Hall.)
- Muris, P., Merckelbach, H., & Collaris, R. (1997). Common childhood fears and their origins. *Behaviour Research and Therapy*, 35, 929-937.
- Muris, P., & Merckelbach, H. (2000). How serious are common childhood fears? II. The parent's point of view. *Behaviour Research and Therapy*, 38, 813-818.
- Muris, P., Merckelbach, H., Ollendick, T. H., King, N. J., & Bogie, N. (2001). Children's nighttime fears: parent-child ratings of frequency, content, origins, coping behaviors and severity. *Behaviour Research and Therapy*, 39, 13-28.
- Samuels, A., & Taylor, M. (1994). Children's ability to distinguish fantasy events from real-life events. *British Journal of Developmental Psychology*, 12, 417-427.
- Sayfan, L., & Lagattuta, K. H. (2008). Grownups are not afraid of scary stuff, but kids are: Young children's and adults' reasoning about children's, infants', and adults' fears.

Child Development, 79, 821-835.

Sayfan, L., & Lagattuta, K. H. (2009). Scaring the monster away: Fears of real what children and imaginary know about managing creatures. *Child Development*, 80, 1756-1774.

Subbotsky, E. (2010). *Magic and the mind: Mechanisms, Functions, and development of the magical thinking and behavior*. New York: Oxford University Press.

富田昌平. (2014). 「怖がらせるー怖がる」関係のなかで育つもの. *季刊保育問題研究*, 270, 64-67.

富田昌平. (2016). 2歳児クラスにおける想像上の怖いものを楽しむ遊び：その展開過程と保育者の働きかけ. *心理科学*, 37, 21-30.

富田昌平・野山佳那美. (2014). 幼児期における怖いもの見たさの心理の発達：怖いカード選択課題による検討. *発達心理学研究*, 25, 291-301.